

山形県建設業協会 会長 千歳 栄



平成十二年、西暦二〇〇〇年は二十世紀最後の年であり、二十世紀を総括して、二十一世紀に活かしてこそ意味があると思ひ、激しく動いた二十世紀の現象を、三つの視点から問題を捉え、二十一世紀を考えてみたい。

科学技術が急進した世紀

二十世紀は十八世紀の第一次産業革命からの流れを受けて、科学技術を駆使し、謳歌した世紀であった。量子学を基にした核兵器・核エネルギーの開発・相対性理論の原理からは、コンピュータ技術の進歩、二十世紀後半にはDNAの発見があり、その操作や改造が行われている。

科学技術の進展は生産技術を革新し、生産量を驚異的に増加し、大量生産・大量消費・大量廃棄という現代社会の出現を促した。物質的に貧しい人間を救う生産が、必要量を凌駕して供給の過剰を呈している。

過剰な物質を浪費する物質文明は人間に精神の貧困という影を落としてきた。近年起きているオウム真理教事件・神戸中学生殺人事件・和歌山カレール殺人事件などの忌まわしい事件が続発している背景には、戦後の教育と共にこの精神の貧困が起因していると思う。二十一世紀の課題の一つは、心の教育と日本人の豊かな精神の復興であると思う。

人間中心主義を拡大した世紀

科学技術の物の供給力は物質的欲求を刺激し、人間の欲望は次第に肥大化してきた。その欲望を軸にした人間中心の思想は、地球の資源を乱獲し、浪費して自然環境を破壊し、人類の生存をも危うくしている。

また肥大化した人間の欲望は、物質生活だけに止まらず、生物生存の理である「生老病死」をも遠ざけようとしている。生 生物種保存の本能を個人の欲望で抑制し、出生を減少させ、

少子化現象を招いている。老 生ある者の必然である老を、科学を用いて必要以上に抵抗し、肉体的生命を植物人間化しても引き延ばし、高齢化社会を増幅している。病 老いけば病むことも必然であるが、現代医療の一部は肉体的生命を超えて、高額医療化を進めているようにも思える。死 生あるものの終局の必然は死である。現代人は肉親の死を見ることも少なく、死を無視して限りなく遠ざけているようである。人間の真の生きる意味は、宗教が諭すように死を見つめ、死を考えてこそ生は充実するものであると思う。

人間の死を遠ざけることは、人類の知恵であり宝庫である宗教を捨てることであり、自分だけ、今だけで孤立し、刹那主義に陥って生きることに向かっているように思えてならない。

二十一世紀は、人間を生かし支えている大自然に畏敬し、その恵みの中で謙虚に、少欲知足で生きることを目指すべきであろう。

アメリカ主義が台頭した世紀

戦後の高度経済成長こそ、二十世紀の革命であるが、現代の経済社会のグローバル化の主役はアメリカ力である。

アメリカ力は科学技術を駆使し、資本主義を武器として政治・経済の勢力を伸ばし、世界に雄飛している。アメリカ力の経済至上主義は市場主義を原理として、他国の経済はもろろん、文化までも侵しつつある。しかし、このアメリカ流資本主義の弱肉強食型の覇権構図には、行き過ぎが目立ち、マレーシアのマハテル首相が反旗を掲げ、日経連の奥田会長も警鐘を鳴らしている。

生物進化論で東西を比較しても、ダーウインの適者生存の理論には欧米流の弱肉強食の思想がにがい、今西錦司の棲み分けの理論には東洋的な互譲と共生の思想を感じる。

国家や民族には、それぞれの生き方や文化や誇りがあり、アメリカ流のグローバリゼーションは自ずと限界に来ていていると思う。二十一世紀は世界の国々が、アメリカ主義的の一元社会から、東洋的な豊かな多元社会の実現を目指す世紀であると思う。